





遊 道 楽 歩
(雑 感)



言葉を話しているようで言葉ではない

長野 修二



目次

企業で不祥事が発生すると、大体経営陣がでてきてなんらかの説明と謝罪をすることが、今日当たり前になっています。

不祥事を起こした企業は、どこもおなじような対応になっているように思えますが、その背景のひとつには、リスク管理コンサルタントや弁護士など外部者のアドバイスがあるからでしょう。

私から見ると少々滑稽な姿に映ってしまいます。

理由は、ロボットがなにやら同じような言葉を並べているように感じるからです。

その場に人間がないのです。

人間とは、自分が自社で起きたことを把握し、どこに問題の本質があって、どのような対応を自社が取ればよいのか、さらに今後どのような方法で発生した問題を克服するかを自分の言葉で説明し、謝罪するものではないでしょうか。

そして最後は、自らの責任を語るものです。

今の社会をみていると言葉は沢山溢れていますが、人間が語る言葉がないと感ずるのは、私だけでしょうか。

そこに社会の中で起こっている本質的な事象が垣間見えます。

危機管理という名のもとに、形あって魂なし。

いわば自分の言葉がないというのは、常に外部者からコントロールを受けて言葉を選んでいないからではないかと想像します。

なぜそうなるか？

自らの責任から会社の責任へと責任を転化させるためかも知りません。

そのことが、言葉（魂がある）から形だけの言葉になる原因でしょうか。

私は、多くの経営陣の会見を聞いていつも不自然さを感じてしまいます。

会社を守るといいながら、経営陣自らを守ることが見え隠れするから言葉なき会見となるのではないかと、私は確信しています。

魂ある言葉とは、常に自らの責任で言葉を語るものであり、常に自らの進退と一体になっているものです。

その覚悟なき経営者があまりにも多いのが今の時代です。

若い人たちは、このような経営陣の会見から自社の体質をよく見抜き、将来このような体質を変えるために頑張ってもらいたいものです。

このような体質が不祥事を発生させているのであり、いくら外部のコンサルタントや弁護士を使っても不祥事の本質にはたどり着けません。

ましてや問題の本質に近づき正しい方向に経営のかじを切ることさへできないでしょう。

間違っても心まで取り込まれて不正に加担するような人生であってはなりません。

どのような状況でも主体は、あくまで自分自身です。

主体性ある人間（自らの責任を自覚できる）に本当の言葉が宿るのは必然です。

言葉を話しているようで言葉ではない

著 長野修二

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
